

中1 「よりよい豊浦中にするために学校環境改善の提案をしよう」

研究主題「学ぶ楽しさや学ぶ喜びを実感させ、学習意欲を高める学習指導の在り方」

—進んで自分の思いを表現し、根拠を明確にして「書く」能力の育成をめざして—

日立市立豊浦中学校 檜山 祥子

1 はじめに

県の学校教育指導方針では、本県の中学校国語における重点課題は「読んだり聞いたりして考えて書く（表現する）力の育成」であると指摘されており、「全国学力・学習状況調査」の結果から「話題に対する自分の考えを明確にするとともに、具体例を挙げて、示された条件に従って自分の考えを書く」ことが指導のポイントとして挙げられている。このように「書くこと」の効果的な指導が求められるところであり、中学校学習指導要領第1学年「書くこと」の目標である「目的や意図に応じ、日常生活にかかわることなどについて、構成を考えて的確に書く能力を身に付けさせる」を叶える実践の必要性を再確認した。

本校の生徒も、文章を書くことに対して苦手意識をもっている生徒が多く、作文への抵抗感をあらわにする様子も見られる。そのため、学期当初や行事後に作文をする際には、書き上げたことで満足し、一つ一つの語句の用法を吟味したり、根拠が明確になっているかどうかを推敲したりせずに書き終えてしまう姿が見られるのが実態である。日常生活における「書くこと」の意識の低さが窺え、国語科の「書くこと」の指導が生かし切れていないのが現状である。

そこで、「書くこと」により主体的に取り組めるようにすることを重視し、自分自身の生活に密接した、必要感をもって作文することができる課題設定こそ重要であると考えた。さらに、根拠を明確にすること、書いた文章を推敲すること、互いの作品を読み合って交流することを通して、日常生活に生かせる書く力の育成を目指し、本主題を設定した。

2 研究の仮説

(1) 仮説1

日常生活に関わることについて題材を設定し、目的意識がはっきりしていれば、より主体的に「書くこと」に取り組むことができるであろう。

(2) 仮説2

自分の根拠が明確になっているかを吟味したり、友人同士で語句の用法や文法上の決まりについて助言し合ったりすれば、言葉への意識が高まるであろう。

(3) 仮説3

作文をするために構成やルールは把握できれば、日常的に「書くこと」への抵抗感を減らすことができるであろう。

3 実践事例

(1) 単元名 「よりよい豊浦中にするために学校環境改善の提案をしよう」

(2) 目 標

- ・自分の意見が相手に伝わるように、根拠を明確にして意見文を書こうとする。
(国語への関心・意欲・態度)
- ・日常生活の中から課題を決め、収集した情報をもとにして、伝えたい事柄について根拠を明確にして意見文を書くことができる。
(書くこと)
- ・表記や語句の用法、叙述の仕方など、文章中の語彙に関心をもつことができる。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

(3) 指導にあたって

本学級の生徒たちは、1学期の「遠い山脈」や「さんちき」などの文学作品の読み取りの中で、本文中の根拠を明確にして自分の考えを述べる活動を行ってきた。中学校入学以来、国語の授業では一貫して根拠を明確にすることの重要性を示してきたため、自分の考えを一方的に押しつけるのではなく、相手が納得するように意見すべきだということを理解できている生徒が多い。事前アンケート（男子14名・女子13名 2名欠席）においても、全員の生徒が、これから社会生活を送っていく上で自分の考えを他者にきちんと伝える能力は必要だと考えている。しかし、学級の4割の生徒は、作品の読み取りのように文章中から根拠を探す作業はできても、相手が納得するような根拠を自分の言葉で語ったり、綴ったりすることに苦手意識を感じている。日常生活においても、自分の主張を捲し立てる様子や、主張が通らない時に意見することを諦めてしまう姿が見られることから、適切に意見する力が十分に身に付いていないことを感じている。一方、「映画は、映画館で見るほうがよいか、ビデオで見るほうがよいか。あなたの考えを、聞いた人が納得するように書きなさい。」という問いに対しては、24名の生徒が明確な根拠を示して意見することが出来ていた。このことと日常生活での姿を照らし合わせたとき、自身が必要感をもって述べるからこそ、明確な根拠をもって主張できる力を育みたいと考えた。

そこで、根拠を明確にすることの重要性を改めて認識し、基本的な論証方法に慣れながら、必要感を感じて学習に取り組むことができる本教材を設定した。本教材で中心となる言語活動は「豊浦中をよりよくするための学校改善案の提案」である。生徒の中には、中学校での校則やルールに対して疑問を抱きながら生活している者もいる。その思いを反発心として捉えるのではなく、一つの主張としての枠組みをもたせることができれば、生徒自身も堂々と思いを述べるができるはずである。そして、意見の根拠を明確にする作業、主張をきちんと伝えるための伝え方を知る活動、友人達と意見文を交流する活動を通して、中学校生活に対する意識の変革も期待できる教材である。

そのため、指導にあたっては、まず自分のこととして学習を捉えることができるように、豊浦中の学校生活に対する意識を共有する時間を設ける。単なる不平不満に陥らないように注意を喚起しながら、4人グループによって多くの意見を出させる。教師自作の「学校改善案」を提示し、今後の学習の到達点をイメージできるようにする。次に、自分が主張する「学校改善案」を一つに絞り、現行の校則やルールも併せて長所・短所を書き出し、根拠を考える。意見文の構成を示した上で、各自で意見文を完成させる。最後に、完成した作品を読み合い、文中の語句の表記や使い方、意見文の構成について感想を述べ合うこととする。このようにして、明確な根拠をもって、的確に自己主張することができる力が育まれることを期待している。

(4) 指導と評価の計画（6時間扱い）

次	時	主 な 学 習 活 動	主 な 評 価
1	1	学習の見通しをもち、学習計画を立てる。 ・「学校改善案」の作成モデルを見て、意見文を書くための目的意識をもち、学習計画を立てる。 ・学校生活について意見を出し、テーマを模索する。	・意見文を書くこと目的を理解し、課題意識をもって学校生活への意見を出そうとしている。 (国語への関心・意欲・態度)
2	2 5	学校生活に関する主張内容を決定し、根拠を明確にして、分かりやすい構成を意識した意見文を書く。 ・決定した主張内容について、現行の校則やルールと照らし合わせながら、長所・短所を考える。 ・長所・短所をふまえ、主張内容の根拠を明確にし、分かりやすい構成を意識して意見文を書く。 ・グループで交流して、お互いの意見文についてアドバイスをし合う。 ・アドバイスをもとに、意見文を完成させる。	・自分の意見をきちんと伝えるための情報を選び取り、根拠を明確にして意見文を書いている。(書く能力) ・文中の語句の使い方や表記について、辞書で調べながら文章を書いている。(言語についての知識・理解・技能) ・分かりやすい意見文にするための構成の工夫に気付いている。 (言語についての知識・理解・技能)
3	6	完成した意見文を読み合って、感想を交流する。	

(5) 学校改善テーマについて長所と短所を書き出し、根拠を明確にする学習（第2時）

① 目標

- ・主張内容の長所と短所を考えることを通して、自分の意見の根拠を明確にすることができる。

② 準備・資料

学習計画表、ワークシート、国語辞典、「学校改善案」モデル

③ 展開

学習活動・内容	支援の手立てと評価
1 本時の学習課題を捉える。 「学校改善案」の根拠を明確にしよう。 2 個人で、決定した「学校改善案」についての長所・短所を書き出す。 〈想定される学校改善案と長所・短所〉 ・教室の座席は自由にすべきである。 長所…・仲が良い友人と近くだと、学校に来るのが楽しみになる。 ・授業で分からないことがあったら、気軽に教え合うことができる。 - 短所…・特定の人とばかり話してしまって、友達が増えない。 ・授業中うるさくなるかもしれない。 ・休み時間の体育館使用を認めるべきである。 長所…・昼休みにグラウンドが使えずにいる人の活動場所が確保できる。 - 短所…・安全の保障が無い。 3 同じようなテーマを選んだ4人でグループを作り、それぞれの「学校改善案」の長所・短所を発表し、助言し合う。 4 本時の学習を振り返り、次時の確認をする。	・学習計画表を黒板に掲示し、単元学習の流れを見通しながら、本時の課題を確認できるようにする。 ・ただ自由を求めるだけの「学校改善案」ではないことを確認し、第三者の立場になって自分の「学校改善案」について考えられるようにする。 ・根拠は複数あった方が説得力が増すことを伝え、できるだけ多くの長所・短所が挙げられるようにする。 ・「楽しい」「つまらない」「よい」「悪い」「面倒だ」のような、個人の主観が入った言葉は根拠にならない旨を伝え、そのような評価をもたらした事実を根拠として書けるようにする。 ・活動が停滞している生徒には、普段の生活を共に振り返り、教師が生徒の思いや考えを引き出せるようにする。 ・決定した「学校改善案」に対する長所・短所の書き出し作業が終わった生徒には、他の生徒の手助けとなるように、他の「学校改善案」についても同様に取り組むように促す。 (評) 日常生活に照らして主張内容について熟考し、長所・短所を書き出している。 (観察・ワークシート) ・前時に決定した「学校改善案」をもとに座席を決定し、スムーズにグループ活動が行えるようにする。 ・友人の意見はどんどん記録するよう伝え、グループ活動によって多くの意見を吸収できるようにする。 ・書き出した長所・短所の中から根拠とする項目を選び、次時は意見文を書いていくことを伝える。 ・本時の反省を記入し、本時を振り返るようにする。

(6) 指導の実際

① 主体的に「書くこと」に取り組むための工夫

ア 日常生活に密接した題材の設定

事前アンケートにおいて「映画は映画館で観るほうがいいのか、ビデオで観るほうがいいのか」という題材で意見文を書かせたところ、以下のような意見文が提出された。

私は、映画はビデオで観るよりも映画館で観るほうが良いと思う。なぜなら、迫力があると思うからだ。大きな音と画面で見れば、ビデオよりも迫力がある。さらに、今は3Dで観ることもできる。3Dテレビもあるが、普段も3Dの画面を見ていると疲れてしまうだろう。お金をかけて観る映画館の方が、普段とは一味違う映画が観られるはずだ。

私は、映画は映画館で観るよりもビデオで観るほうが良いと思う。なぜなら、映画館だとお金がかかるし、止めたいときに止められないからだ。ビデオはお金がかかるけれど、映画館よりは安いし、観たいときに再生することができる。だから、私は映画館で観るよりもビデオで観るほうが良いと思う。

私は、映画館で観るほうが良いと思う。なぜなら、人気の映画なら映画館で観ないと話に乗り遅れるし、小さいビデオで観るよりも大スクリーンの映画館で観るほうが迫力があるからだ。

ほとんどの生徒が上記のように根拠を挙げ、自分の考えを述べる文章を書いていた。もちろん、「映画館で観たほうが良いと思う。ビデオを借りるのがめんどくさいから。」という根拠が曖昧な文章を書く生徒もいたが、事前アンケートの題材については、多くの生徒が根拠を明確にして書く力を備えていることを確認することができた。

では、小学校時代にも「書くこと」の指導を受け、一通りの文章を書くことができる生徒にとって、「書くこと」への抵抗感が高まってしまうのはなぜなのか。その問いを解決するために、「何のために書くのか」という目的意識の部分に着目する必要があると考えた。

人と人との関わり合って生活し、円滑なコミュニケーションを図る上で、自分の考えを、自分の言葉で述べる力が不可欠となる。そのために、自分の意見を明確にし、その意見を支える根拠や事例を挙げて書くことの重要性や方法を知らせることが、国語科における「書くこと」の指導の意義であると思う。そうして書いた文章が誰かに受け入れられたり、周囲からの反応を得られたりしたときに、充足感を感じると共に、「書くこと」への抵抗感が減っていくのであろう。しかし、国語科で取り上げる作文の題材は日常生活と離れたものであることが多く、自分の考えを述べることができた実感が得づらいのではないだろうか。

そこで、今回は題材を「よりよい豊浦中にするために学校環境改善の提案をしよう」とし、自分が学校生活に対して抱いている「もっと〇〇だったらいいな」を意見文として書くこととした。生徒からは、学校生活のルールや環境に対する思いが続々と寄せられ、多くの生徒が意見文を書くことへの意欲を高めることができた。

イ 「書くこと」の必要感と目的の明確化

第一時に学習計画を立てる段階で、生徒自身から「校長先生に提出したい!」という案が挙がってきた。想定した通り、「学校改善案を書いてもどうせ変わらないですよ。」という声も聞こえてきていたため、校長先生に提出することを決定すると、気持ちをみなぎらせる生徒が多かった。自分が生活する中で考えていることを表現し、それが何かを変化させる可能性があるとなると、作業に取り組む生徒の姿がこれまでと大きく異なることを感じた。



② 「書くこと」への抵抗感を減らすための工夫

ア 意見文の構成理解

生徒は、説明的な文章の読解を通して、文章が大きな3つのまとまりに分かれることを理解している。それと同様に、自分の考えを伝えるための文章も、読む人が分かりやすい文章にするために構成の工夫が必要であることを伝えた。国語便覧を参考にしながら、以下のような枠組みを示して作文した。文章を書くことが苦手な生徒のみならず、書き出しの言葉があることで見通しが立ち、スムーズに作業を進めることができた。

はじめ	自分の考えや立場を示そう。	
	立場や主張から	「私は・・・と考える。」
	問いかけ形式 (問題点が明確になる)	「・・・は・・・ではないだろうか。」
なか	意見の根拠を述べよう。	
	取り上げる項目の数を示す	「第一に、・・・第二に、・・・。」
	接続詞を使いこなす	「まず、・・・次に、・・・。」
	反対意見を想定する。 (上級テクニック)	「確かに、・・・という意見もある。しかし、・・・。」
終わり	最も伝えたいことを述べよう。	
	最後にもう一度主張	「以上のことから、私は・・・と考える。」

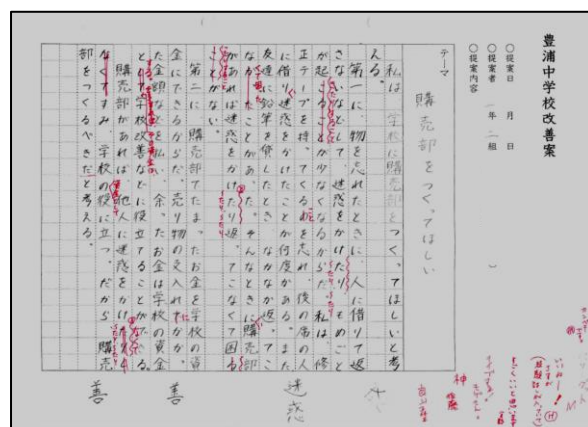
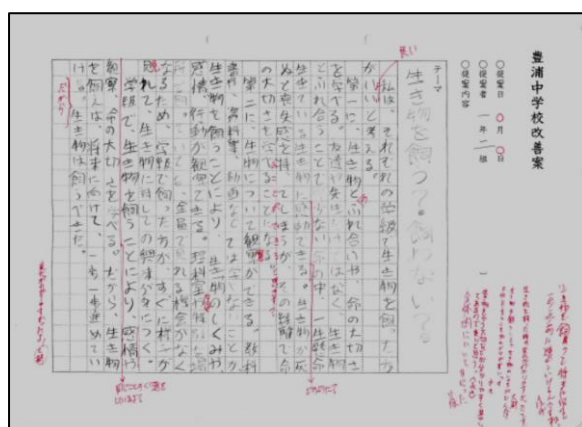
イ チームでの練り合い

「学校改善案」のテーマを決定した後、似通ったテーマを選んだ生徒同士でチーム分けし、席配置を替えて授業を進めた。どのような根拠が説得力があるかを相談したり、自分に無い考えはどんどん吸収したりしてよいこととし、「書くこと」に苦手意識のある生徒も周囲に協力を仰ぎやすい体制にした。同じような文章になってしまう可能性があるため、作文の段階からは通常の席配置に戻すこととした。

③ 書いたものを吟味し、高めるための工夫

ア チームでの助言の場の設定

友人が書いた文章を読み、根拠が明確になっているか、誤字脱字や文法上の誤りがないかをチェックし、助言やコメントを書き入れていった。最初は遠慮がちに赤ペンを握っていたが、一つ一つ言葉を吟味し、間違いをきちんと指摘し合う様子が見られた。自分では気が付かない誤りを指摘され、赤が入った箇所を再考することができていた。まだ、普段つい使ってしまう「なので」や、「～たり、～たり」の使い方など、全体で確認する機会となった。



4 研究の成果

(1) 仮説1について

「学校改善案」を書くという活動が明確であったため、全員の生徒が「書くこと」に対して目的意識をもって活動できた。学校で過ごす時間が生活の大半を占める中学生にとって今回の題材は取り組みやすく、意欲付けの観点では大きな成果を得られたと思う。また、実際に校長先生に「学校改善案集」を提出し、Tシャツの素材改善や時計の整備、空調に関する事案に対して検討していただけることになった。自分の考えを、根拠を明確にして述べていくこと、その思いが伝わることの充足感を感じることができた機会であった。

(2) 仮説2について

当初、根拠として多く挙がってしまっていたのが、「面倒だから」「疲れるから」「楽だから」といった主観的な評価語であった。これらの言葉が説得力に欠けるという指導を踏まえ、友人の根拠に対して「これは主観的だよ」と指摘する声が多く聞かれた。また、一人一冊辞書を手元に置いて作業し、漢字のミスや言い回しの不確かさについて、辞書を使って確認することができていた点からも、言葉一つ一つにこだわる姿勢を身に付ける足掛かりとなったと思う。

(3) 仮説3について

「書くこと」への抵抗感は、何をどのように書けばいいのかが分からないことにも起因しているのだろう。基本的な構成や、言葉の言い回しの基本パターンを伝えることによって、スムーズに作業を展開することができた。書き方のパターンを知り、作文の機会を多く設けることが書く力の向上に繋がることはもちろん、書いたものが受容された充足感を得ることも必要なのだと実感することとなった。

5 今後の課題

- ・今回のように、学校生活に関連した身近な題材に対して自分の考えがもてるようになったら、社会情勢や環境問題、情報化社会に対してなど、世の中の様々な事象に対しても意見をもてるようにしていかなければならない。題材の内容についても、学年を追うごとにステップアップさせていきたい。そのためにも、学校教育の中に新聞を読む機会を設けるなど、世の中の動きに目を向け、生徒が自然に自分の意見をもてる環境作りが求められると思う。
- ・専門的な文章や発言を引用したり、図表やグラフを用いたりするなど、より説得力をもたせるための工夫についても伝えていかなければならない。限られた字数の中で効率的に作業にあたるように、発問や指導方法について吟味していく必要がある。
- ・構成理解については、教師からの一方的な指導に終始してしまったことが課題である。意見文の比較読みをし、生徒自らが分かりやすい文章の構成に気付けるようなワークシートなどを作成していきたい。